

「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画（原案）」に対する公聴会

平成 25 年 2 月 25 日（日）13:00～13:15

高崎河川国道事務所 1 階会議室

発言者：公述人 5

座って失礼します。高崎市に在住しております■■■■です。私は、この利根川水系利根川・江戸川河川整備計画の原案に対して、反対の立場といいますか撤回を求める立場で発言をさせていただきます。まず最初に申し上げたいのは、この原案が利根川と江戸川の本川のみを対象としている、このことです。利根川水系には、渡良瀬川や鬼怒川、霞ヶ浦など大きな支川がいくつもあります。利根川の河川整備計画を策定するというなら、これらの支川も含めた支川全体を総合的にみて策定するべきだ、そう考えています。支川と本川は相互に関係しており、特に支川の状況は本川に影響します。両者を切り離しておいて、本川だけの整備計画を先行するというのは、科学的にみて正しいとは思えません。次に、治水目標流量についても問題を感じています。原案の治水目標流量は、 $17,000\text{m}^3/\text{s}$ とされています。これは過大な基本高水流量 $22,000\text{m}^3/\text{s}$ の計算モデルを使って治水安全度70分の1から80分の1に対応する流量を求めた値です。しかし、1947年、これがモデルになっているわけですが、1947年のカスリーン台風洪水の実績流量が $15,000\text{m}^3/\text{s}$ 程度であったことが当時の建設省の資料で明らかになっています。15,000 m^3/s であれば、国交省の計算では既設ダムによる調節量が1,000 m^3/s 以上、河川対応流量は14,000 m^3/s であり、新たにダムを造る必要がないこととなります。利根川・江戸川有識者会議でも、17,000 m^3/s 、この数字が科学性が乏しい、きわめて過大な流量を算出するものであることが指摘されています。この17,000 m^3/s という数値を前提にして策定された河川整備計画原案もまた同様に科学性に乏しいといわざるをえません。わざわざ17,000 m^3/s という数値に引き上げたことに、八ッ場ダム建設の必要性をひねりだそうとする意図が伺えます。こうした虚構の上に進められれば、利根川水系の治水を誤らせることになるものと考えます。治水目標流量を科学的に計算し直すことが妥当ではないでしょうか。次に八ッ場ダムについて述べたいと思います。八ッ場ダムの治水効果は、下流にいくほど大きく減衰することがわかっています。最近60年間で、最大の洪水となった1998年9月の洪水において、その水位低減効果を計算したところ、八斗島地点でわずか13cmであることが明らかになりました。利根川や江戸川の下流部では最大にみても水位低減が数cmしかありません。これは関東地方整備局の計算で明らかになっていることです。このことは、利根川の治水対策の面で八ッ場ダムが造られる意味がないことを示しています。また、利水の面からも八ッ場ダムの必要性がないことを述べておきます。現在、首都圏の水需要は減少の一途を辿っています。東京都の水道を例に取れば1992年度から2012年度までの20年間で、1日最大給水量が約150万 m^3 も減っています。これは節水型機器の普及などによって1人当たりの給水量が減ってきた。このことが言えるんだと思うんです。首都圏においても水需要の減少傾向はこれからも続くことが予想されます。利水の点から見ても八ッ場ダムの必要性はないものと考えます。また、八ッ場ダムの予定地についても述べておきたいと思います。八ッ場ダム建設予定地は地質が脆弱であり、今でも地すべりや崩落事故が起きています。ダムを造り水位を上下させれば深刻な地すべりが発生する危険性が高い場所です。また、ダムの本体が造られるのは吾妻川の中流域です。上流には高原リゾート北軽井沢や、温泉、スキー場として賑わう草津や万座などの観光地が点在し

ています。嬭恋村は首都圏の高原野菜の産地として大変有名で浅間高原では牧畜も盛んに行われているところです。こうした上流から流入する生活排水、農薬、化学肥料、畜産排水などに含まれる栄養塩類は人口数十万人規模の都市の排出量に匹敵するとされています。栄養塩類の濃度がかなり高いところにダムを造り、流水を溜まり水に変えると藻類、藻の類が異常増殖が進行し水質がひどく悪化します。八ッ場ダムについては、治水のため、利水のためなど色々な根拠がこれまでも出されましたが、これらが科学性に乏しい、このことが既に明らかにされています。それでもなお、この原案が示されるというのは、八ッ場ダム建設ありきの考え方が据えられ、この建設を急ぐための意図であると思えません。治水にも、利水にも必要性のないダムを地すべり災害を誘発するような場所に造るという計画を、私は容認することができません。一方で、利根川及び江戸川の本川、支川では洪水によって水位が上昇すると、破堤する危険性がある脆弱な堤防が各所にあります。浸透防止対策が必要な区画の割合は利根川で62%、江戸川も60%に及んでいます。これらがもし破堤すれば甚大な被害をもたらすおそれがあります。また、利根川流域における最近の氾濫はもっぱらゲリラ豪雨による内水氾濫、降った雨が吐ききれずに溢れるものであり、ゲリラ豪雨による内水氾濫の対策として雨水貯蓄浸透施設の設置や排水機場の強化などに重点を置いた河川整備計画こそ、すぐに必要であると考えます。こうした喫緊といえる課題を後回しにしておいて、不要と思えない八ッ場ダム建設を急ごうというあからさまな意図を持ったこの原案、わたくしは防災対策としてのほんとうのあり方を誤らせるものではないかと考えます。これからは、これまで数多く造られてきた社会資本の維持管理費や更新費が必要であり、そちらにあてる予算が増えざるを得ないでしょう。これまでのようには新規事業に使うことは出来なくなると思います。新規の大型開発がこれまで長い間押し進められ、国土は疲弊しています。河川整備計画も基本的な考え方を改める時ではないでしょうか。私は昨年初夏から年末まで吾妻へ通う機会がありました。吾妻溪谷は大変美しいところだと感じました。それぞれの季節にそれぞれの魅力を感じます。余談ですが、わたしはこの地で、生まれて初めてカモシカを間近で見ました。大変感激をした覚えがあります。この溪谷にも豊かな生態系があり、これをどう次の世代に引き継いでいくのか、今これが問われる時代じゃないでしょうか。一度狂わされた生態系を戻すことは容易ではありません。これまで、ここにダムを造るために地元住民を移転させ、歴史ある温泉街まで移し、いくつもの橋を架けて道路や線路を付け替え、ダムの周辺工事だけで巨額の税金が投じられてきました。ダムが完成したら、ダムサイトを観光の目玉にするといった計画があるようですが、仮に、ダムが出来上がったところで周囲の山肌は、地すべりを防ぐためのコンクリートやアンカーだらけ、ダム湖の水は藻類の増殖などで異様な色を呈した場所となり、美しい自然の景観とはおよそかけ離れた光景が広がることでしょう。観光資源としての魅力はゼロであらうと思います。河川整備に限らず、公共事業は国民の安全と利益を守ることが目的であるはずで、同時に、これからは自然環境に与える影響を最小限にするなどの手段、技術が求められていると思いません。また、最小限の費用で最大限の効果をもたらすことも必要です。今回の河川整備計画のような手段と目的とを取り違えたような事業、そのために巨額の税金を今後も投じ続けることを進める、こういう原案は明らかに問題であると考えます。河川整備計画の目的は、ダム建設ではないはずです。利根川・江戸川河川整備計画原案の撤回を求めます。流域住民の安全を本当に守ることが出来、自然環境を守り、回復出来るような河川整備計画を進めていただくことを強く求めます。また、策定にあたっては流域住民や専門家を交えて科学的、民主的な議論と運営をされることも同時に強く要求します。時間がかなりあまっていると思いますけれども、わたしの言いたいことは以上です。これで公述を終わらせていただきます。ありがとうございました。

以上